

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 2002-126038

(43)Date of publication of application : 08.05.2002

(51)Int.Cl.

A61H 39/08

(21)Application number : 2000-321807 (71)Applicant : SEIRIN KK

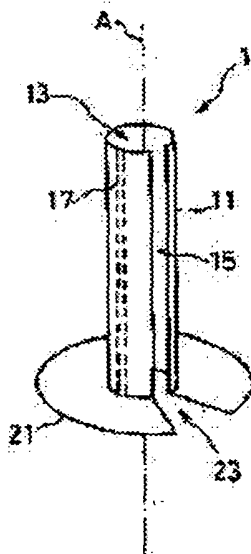
(22)Date of filing : 20.10.2000 (72)Inventor : NAKANO RYOICHI
ITO DAISUKE

(54) AUXILIARY IMPLEMENT FOR ACUPUNCTURE AND MOXIBUSTION

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide an auxiliary implement for acupuncture and moxibustion, which reduces inconvenience in handling and can independently correspond to a plurality of regions of a body of a patient.

SOLUTION: The auxiliary implement 1 is composed of a tube-shaped main body 11, which is provided with a slit 15 on one side, and a flange 21 formed integrally at the lower end of the main body 11 and provided with an incision 23 formed with an opening from an inner space 13 in such a manner as to continue into the slit 15. The slit 15 has an approximately enough width to allow for the passing of the head of a needle, and the incision 23 is expanded beyond the width of the slit 15 at an angle of α .



(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号
特開2002-126038
(P2002-126038A)

(43) 公開日 平成14年5月8日 (2002.5.8)

(51) Int.Cl.⁷
A 6 1 H 39/08

識別記号

F I
A 6 1 H 39/08

キーワード (参考)
H 4 C 1 0 1

審査請求 未請求 請求項の数18 O L (全 8 頁)

(21) 出願番号 特願2000-321807 (P2000-321807)

(22) 出願日 平成12年10月20日 (2000. 10. 20)

(71) 出願人 390024545

セイリン株式会社
静岡県清水市袖師町1007番地の1

(72) 発明者 中野 亮一

静岡県清水市袖師町1007番地1 セイリン
株式会社内

(72) 発明者 伊東 大介

静岡県清水市袖師町1007番地1 セイリン
株式会社内

(74) 代理人 100078330

弁理士 笹島 富二雄 (外1名)

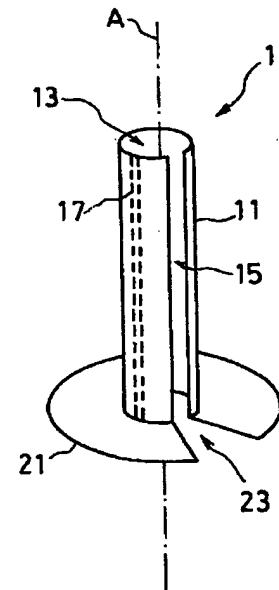
Fターム (参考) 4C101 DA01 DC01

(54) 【発明の名称】 鍼灸施術用補助具

(57) 【要約】

【課題】 取扱上の煩わしさが少なく、また一人の患者の複数の身体部位に対して1つで対応可能な鍼灸施術用補助具を提供する。

【解決手段】 一侧にスリット15を設けたチューブ状の本体11と、該本体11の下端部に一体形成され、スリット15に続いて内部空間13からの1つの開口を形成する切込み23を設けた鍔21とから補助具1を構成する。スリット15の幅は、針の頭部が通過できる程度とし、切込み23は、スリット15の幅から角度 α をもって拡げる。



【特許請求の範囲】

【請求項1】本体に針を挿入可能に貫通する内部空間を形成し、施術時に針を該内部空間内に配置することによって針と施術者との接触が遮断されるようにした鍼灸施術用補助具であって、

前記内部空間の壁部に前記貫通方向に縦断する切込みを設け、前記内部空間を、前記貫通方向に沿う両端部間に渡って外部と連通させたことを特徴とする鍼灸施術用補助具。

【請求項2】前記本体を管状とし、その内壁によって前記内部空間が形成されることを特徴とする請求項1に記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項3】前記本体を中空の円錐状とし、その内壁によって前記内部空間が形成されることを特徴とする請求項1に記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項4】一方の端部に鉤を備え、前記本体の切込みに続けて該鉤に切込みを設けたことを特徴とする請求項1～3のいずれか1つに記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項5】軸線方向に縦断する切込みを一側において備え、該軸線を包囲する形状の本体と、前記本体の一方の端部に設けられ、前記本体の切込みに続いて前記本体の内部空間からの開口を形成する切込みを設けた鉤と、

を含んで構成される鍼灸施術用補助具。

【請求項6】前記本体の切込みを形成する本体の断続部を、前記鉤の少なくとも一部まで延設したことを特徴とする請求項4又は5に記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項7】前記鉤の切込みを放射状に広げたことを特徴とする請求項4～6のいずれか1つに記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項8】前記鉤において前記本体の切込みに続く切込み以外にも切込みを設けたことを特徴とする請求項4～7のいずれか1つに記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項9】前記本体の切込みに続く切込み及び他の切込みを放射状に配置したことを特徴とする請求項8に記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項10】前記一方の端部の反対側の端部にも鉤若しくは肉厚部を備え、前記本体の切込みに続けて該鉤若しくは肉厚部に切込みを設けたことを特徴とする請求項4～9のいずれか1つに記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項11】前記本体の切込みを一直線に設けたことを特徴とする請求項1～10のいずれか1つに記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項12】前記本体の切込みに幅を持たせたことを特徴とする請求項1～11のいずれか1つに記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項13】前記本体の内壁に針の案内を設けたことを特徴とする請求項1～12のいずれか1つに記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項14】前記案内は、前記本体の内壁に形成され

た凹部を含んで構成されることを特徴とする請求項13に記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項15】前記案内は、前記本体の内壁に形成された凹部と、該凹部と係合する凸部とを含んで構成されることを特徴とする請求項13に記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項16】前記凹部は、本体の内壁に形成された2つの凸部の間に形成されることを特徴とする請求項14又は15に記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項17】前記内部空間は、針とともに使用される針管を挿入可能であることを特徴とする請求項1～16のいずれか1つに記載の鍼灸施術用補助具。

【請求項18】樹脂から一体形成したことを特徴とする請求項1～17のいずれか1つに記載の鍼灸施術用補助具。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、鍼灸治療法の分野で針とともに使用される鍼灸施術用補助具に関し、より詳細には、施術時において施術者の指と針体との接触を防ぎ、施術者及びその患者の安全を確保するための鍼灸施術用補助具に関する。

【0002】

【従来の技術】施術者は、鍼灸針のうち細くて長い針（毫針）を次のような手段により、患者に刺入する。管針法によれば、針管に挿入した状態で針をツボに立て、切皮（穿皮）と呼ばれる動作により、針先を2～3mmほど硬い皮膚を通過させ、その後針管を取り去り、右利きの場合には、左手（押手）で針体を支え、かつ針先の刺入している皮膚を押し開くようにして、右手（刺手）で刺入を進める。

【0003】このとき、針体には、押手の親指や人差し指が触れてしまう。従って、使い捨ての針を最初に使用するときには、このようにして施術者の指が針体に触れることにより、ヒト蛋白（皮膚のかげら）や指に付着した微生物で針を汚染するという危険を冒すこととなる。また、治療後の抜針と呼ばれる針を取り除く動作の際や、同じ針を2回目以降に使用する際にも、押手で針体に触れることとなるが、この際には、前述の危険に加えて、一度患者の体内に入った針体部分に施術者の指が触れるという別の危険を冒すこととなる。

【0004】従って、針を刺入する際に施術者の指が針体に触れることは、施術者に対しても、また患者に対しても、安全上避けたい行為である。しかし、実際には、押手を添えないと、針を正確に刺入するのは困難である。そこで、安全上の対策として、従来より、施術者はゴム手袋又は指サックなどの補助具を使用するのが好ましいとされてきた。また、同様な目的を達するためのより簡易な補助具として、押手用ガイドチューブと呼ばれるものも提案されている。

【0005】ここで、押手用ガイドチューブについて簡単に説明する。押手用ガイドチューブは、針管を挿入可能な管状であって柔軟性を有しており、針管を挿入した状態で切皮を行った後に針管のみを取り去って、チューブの外側から針体を支えながら（このとき、チューブは押し潰された状態となる。）刺入及び抜針を行うことができ、ゴム手袋などと比べて取扱いが簡単でありながら、ゴム手袋などと同様に施術者の針体への接触を回避することができるものである。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、これらの従来の補助具を使用するのには、次のような問題がある。まず、ゴム手袋又は指サックを使用する場合には、作業が煩雑になるという問題がある。施術者は、一人で何人も患者を並行して施術するのが一般的であるが、この場合にゴム手袋などを使用するとすれば、ゴム手袋などを患者毎に取り換えなければならないからである。

【0007】一方、押手用ガイドチューブは、治療中に針体から着脱するのが構造上容易でないことから、通常1つの針につき1つずつ用意されるものであるため、上記のような取扱上の煩わしさはないが、別に次のような問題がある。すなわち、押手用ガイドチューブは治療中に針体から取り外されないため、針の長さや刺入の深さによっては、治療の間、針を覆い続けるものも存在する。このようなものは、刺入後の電極などのクリップを困難とし、また治療中の針の監視を面倒なものとする。

【0008】このような実状に鑑み、本発明は、従来の押手用ガイドチューブのように取扱いが簡単でありながら、針からの着脱が容易である鍼灸施術用補助具を提供することを目的とする。

【0009】

【課題を解決するための手段】このため、本発明に係る鍼灸施術用補助具は、本体に針を挿入可能に貫通する内部空間を形成し、施術時に針を前記内部空間内に配置することによって針と施術者との接触が遮断されるようにした鍼灸施術用補助具であって、前記内部空間の壁部に前記貫通方向に縦断する切込みを設け、前記内部空間を、前記貫通方向に沿う両端部間に渡って外部と連通させたことを特徴とする（請求項1）。

【0010】前記本体を管状若しくは中空の円錐状とし、その内壁によって前記内部空間が形成されるのが好ましい（請求項2、3）。また、一方の端部に鐳を備え、前記本体の切込みに続けて該鐳に切込みを設けるのが好ましい（請求項4）。また、本発明に係る鍼灸施術用補助具は、軸線方向に縦断する切込みを一側において備え、該軸線を包囲する形状の本体と、前記本体の一方の端部に設けられ、前記本体の切込みに続いて前記本体の内部空間からの開口を形成する切込みを設けた鐳と、を含んで構成される（請求項5）。

【0011】また、前記本体の切込みを形成する本体の断続部を、前記鐳の少なくとも一部まで延設するのが好ましい（請求項6）。前記鐳の切込みは、放射状に拡げるのが好ましい（請求項7）。前記鐳において前記本体の切込みに続く切込み以外にも切込みを設け（請求項8）、前記本体の切込みに続く切込み及び他の切込みを放射状に配置するのが好ましい（請求項9）。

【0012】また、前記一方の端部の反対側の端部にも鐳若しくは肉厚部を備え、前記本体の切込みに続けて該鐳若しくは肉厚部に切込みを設けるのが好ましい（請求項10）。前記本体の切込みは、一直線とし（請求項11）、幅を持たせるのが好ましい（請求項12）。

【0013】本発明に係る鍼灸施術用補助具は、前記本体の内壁に針の案内を備えるのが好ましい（請求項13）。前記案内は、前記本体の内壁に形成された凹部を含んで構成されるのが好ましく（請求項14）、また、前記本体の内壁に形成された凹部と、該凹部と係合する凸部とを含んで構成されてもよい（請求項15）。

【0014】前記凹部は、本体の内壁に形成された2つの凸部の間に形成されるのが好ましい（請求項16）。前記内部空間は、針とともに使用される針管を挿入可能であるのが好ましい（請求項17）。本発明に係る鍼灸施術用補助具は、樹脂から一体形成するのが好ましい（請求項18）。

【0015】

【発明の効果】請求項1に係る発明によれば、施術時に針が配置される内部空間の壁部に、貫通方向に縦断する切込みが設けられているため、この切込みを介して本補助具を針から取り去り、さらに針に取り付けることができる。従って、治療中に本補助具を針に対して任意かつ容易に着脱することができ、刺入や抜針の際に施術者の指と針体との接触を遮断するばかりでなく、刺入後に本補助具を針から取り去ることにより、電極などのクリップや針の監視を容易なものとすることができる。

【0016】請求項2、3に係る発明によれば、本体を管状若しくは中空の円錐状とすることで、刺入や抜針の際の作業性が良好となる。請求項4に係る発明によれば、本体の一端部に備わる鐳により、患者の刺入部位を保護することができる。請求項5に係る発明によれば、本体の切込みと鐳の切込みとで形成される開口を介して、本補助具を針から取り去り、さらに針に取り付けることができる。従って、治療中に本補助具を針に対して任意かつ容易に着脱することができ、刺入後に本補助具を針から取り去ることにより、電極などのクリップや針の監視を容易なものとすることができる。

【0017】請求項6に係る発明によれば、本体の断続部を鐳の少なくとも一部まで延設したことで、抜針時において本補助具を針に取り付ける際の利便性が得られるとともに、施術者の指が針体に接触し難い構造となる。請求項7に係る発明によれば、鐳の切込みを放射状に拡

げたことで、本補助具の針への取付けが容易となる。

【0018】請求項8に係る発明によれば、鉗において本体の切込みに続く切込みの他にさらに切込みを設けることで、本補助具の柔軟性を向上させることができる。請求項9に係る発明によれば、本体の切込みに続く切込み及び他の切込みを放射状に配置することで、本補助具に良好な柔軟性を付与することができる。請求項10に係る発明によれば、本体の反対側の端部にも鉗若しくは肉厚部を備えることで、本補助具の剛性を向上させ、着脱をより容易なものとするることができる。

【0019】請求項11、12に係る発明によれば、本体の切込みを一直線とし、また切込みに幅を持たせることで、本補助具の着脱がスムーズとなる。請求項13に係る発明によれば、刺入の際に針を案内し、針の湾曲を防ぐことができる。請求項14～16に係る発明によれば、上記針の案内を簡単に設けることができる。

【0020】請求項17に係る発明によれば、本補助具を針管に取り付けた状態で切皮を行うことができるので、切皮後は針管を取り去ることのみで刺入に移ることができる。請求項18に係る発明によれば、樹脂から一体形成することで、柔軟性がある心地よい使用感を与え、また施術者の指と針体との間の隔離性も良好なものとするることができる。

【0021】

【発明の実施の形態】以下に、図面を参照して、本発明に係る鍼灸施術用補助具（以下、単に「補助具」という。）の実施の形態について説明する。まず、本発明の第1の実施形態に係る補助具1の構成について、図1及び2を参照して説明する。なお、図1は、補助具1の全体的な概観を表した斜視図であり、図2は、補助具1を図1の上方から見た状態を表した平面図である。

【0022】補助具1は、大まかに言えば、チューブ状（図では、平行管状に形成した例を示しているが、本発明はこれに限定されず、いずれか一方（例えば、下方）に拡張された中空の円錐状に形成してもよい。）の本体11と、その下端部に本体11と一体形成された円状の鉗21とから構成されている。本体11は、樹脂（例えば、ポリオレフィン系エラストマー）から形成されていて柔軟性、可撓性、弾性があり、施術時において押手による針の感触の獲得と、十分な強度の確保とを両立させることができるように、材料の選択及び厚さの設定がなされている。

【0023】本体11は、一側において断続部が設けられており、ここに内部空間13の軸A方向に縦断する切込み15が形成されている。内部空間13は、本体11の上下両端部間に渡り、この切込み15を介して外部と連通している。ここで、切込み15は、その形態に応じてスリットとか、すり割りとも呼ばれるものであり（以下の説明では、後述する鉗21の切込みと区別するため、「スリット」と称する。）、その形態は多様である

が、図示のように一直線にかつ適度な一定の幅を持たせて形成されるのが好ましい。

【0024】また、内部空間13を形成する本体11の内壁には、本体11の上下両端部間を軸Aに沿って一直線に縦断する溝（凹部）17が設けられている。一方、本体11の下端部に設けられた鉗21は、前述の通り本体11と一体形成されたものであるから、材質は本体11と同じ（すなわち、ここではポリオレフィン系エラストマー）であり、柔軟性等を有する。しかし、針の感触を伝えるという機能を要求されるものではないので、本体11と比べて多少の厚みの増大は許容される。ここでは、鉗21の厚さは、本体11の厚さより大きく設定してある。

【0025】また、鉗21には、スリット15に続けて、角度 α で放射状に広がる切込み23が設けられており、この切込み23は、スリット15とともに内部空間13から外部への1つの開口を形成している。次に、補助具1を使用するの施術方法について、図3～5を参照して説明する。なお、図3は、切皮の段階を、図4は、切皮後の刺入の段階を、図5は、刺入後の治療及び抜針の段階を示したものであり、これら図3～5に示す一連の動作を通して1回の施術が完了する。

【0026】まず、切皮は、図3（a）に示すように、針31を針管41内に収めるとともに、針管41に補助具1を取り付けた状態で行う。すなわち、針体31aをツボに立てるようにして、補助具1付きの針管41を患者の所定の身体部位に当て、針管41の上から突出する針31の頭部31bを軽く叩いて、針体31aの先端を2～3mm程度刺入させ、皮膚表面51の硬い部分を通過させる。その後、補助具1を押さえながら、図3（b）に示すように針管41を上方へ抜き去る。

【0027】次に、図4に示すように、補助具1の本体11を押手61の親指61aと人差し指61bとの間に挟んで、補助具1の外側から針体31aを支えつつ（このとき、本体11は押し潰された状態となる。）、刺手（図示せず）で刺入を進める。ここで、押手61と針体31aとの間には補助具1が介在するので、施術者と針体31aとの接触が遮断される。

【0028】また、本体11の内壁には、図2に示すように溝17が形成されているため、この溝17内に針体31aを収めて刺入を進めることにより、針31を案内し、針体31aの湾曲を防ぐことができる。なお、針を案内する作用を奏する他の例として、溝を複数設けたり、また図6（a）に示すように、針体31aを押手で支えた状態で係合する溝（凹部）18aと凸部19aとの組合せ（図では、2つの組合せを設けた例を示している。）を、本体11の内壁に形成してもよい。また、本体11の内壁に設けられる溝は、以上のように本体11の内壁面に対して凹状にしたものに限らず、図6（b）に示すように、本体11の内壁面に対して突出する2つ

の凸部19c、19cを形成し、これらの間に形成してもよい。ここで、凸部19bは、対応する2つの凸部19c、19c間の凹部18bと噛み合い、針体31aは、凸部19bと凹部18bとの間に収められて、案内される。

【0029】また、本体11の内壁に形成される凸部は、本体11の上下両端部間に渡って一貫して設けられる必要はなく、要求に応じて部分的に設けられてもよい。図7は、このような部分的な凸部の例を表している。ここで、図7(a)は、本体11の内壁において、上下両端部を除く中間部にのみ凸部19b及び19cを設けたものを表しており、また図7(b)は、凸部19b及び19cを2個以上に、軸A方向に間隔を空けて設けたものを表している。

【0030】このように針31の案内を本体11の内壁において部分的に設けることにより、針体31aとこれに接する本体11の内壁との間や、互いに接する本体11の内壁の間に、軸A方向の段差が形成され、刺入や後述する抜針の際に、針体31aと本体11の内壁との間の密着や、本体11の内壁面どうしの密着を防ぐことができ、押手を放したときの本体11の復元性を確保することができる。

【0031】施術の説明に戻り、針先が目的の深さに達したならば、図5(a)に示すように、本体11のスリット15及び鏝21の切込み23を介して針31から補助具1を取り去り、針体31a又は導電性である頭部(「針柄」ともいう。)31bに電極を接続するなどして所定の治療を行う。この治療の間に、取り去った補助具1を他の身体部位における施術のために使用することができる。

【0032】ここで、針31を深く刺入する場合や、比較的短い針31を使用する場合には、頭部31bが補助具1の内部空間13内にまで至ることもある。このため、スリット15の幅を頭部31bの外径より大きく設定し、補助具1を針31から取り去る際に、頭部31bがスリット15を通過することができるようにするとよい。

【0033】治療終了後は、切込み23及びスリット15を介して補助具1を再び針31に取り付け、補助具1の上から刺入部を押さえながら抜針を行う。なお、刺入後の治療に当たって補助具1を取り去る必要がない場合には、補助具1を針31とともにそのまま残したとしても、補助具1は樹脂製であって軽量であることから、患者に対して過度の違和感を与えることはない。

【0034】次に、本発明に係る補助具の他の実施形態について説明する。まず、図8を参照して、本発明の第2及び第3の実施形態に係る補助具101及び201について説明する。なお、図8(a)及び(b)、それぞれ補助具101、201の全体的な構造を示す断面図であり、先の補助具1と同一の構成要素に対しては、同

じ符号を付してある。

【0035】これらの補助具101及び201において特徴的な構成は、本体11の上端部に、本体11と一体形成された第2の鏝111又は本体11の肉厚部211を備えることである。先の補助具1では、本体11は完全な管体であり、厚さは上端部から下端部に渡って一様であった。このため、補助具1としての剛性はそれ程高くなく、変形し易い構造となっていたが、補助具101及び201は、第2の鏝111又は肉厚部211によって剛性が向上されているため、変形を抑えることができ、取り去った後に針31に容易に取り付けることができる。

【0036】なお、第2の鏝111には、スリット15に続けて切込み113が、また肉厚部211には、スリット15と一体となって本体11の切込みを形成する切込み213が設けられており、補助具101及び201の着脱は、これらの切込み113又は213を介して行われることは言うまでもない。次に、図9及び10を参照して、本発明の第4の実施形態に係る補助具301について説明する。なお、図9は、補助具301の全体的な概観を表した斜視図であり、図10は、補助具301を図9の上方から見た状態を表した平面図である。また、先の補助具1と同一の構成要素に対しては、同じ符号を付してある。

【0037】補助具301において特徴的な構成は、鏝21において、スリット15に続く切込み23の他に、さらに2つの切込み325、325を備えることである。これらの他の切込み325は、切込み23と同様に角度 $\alpha 2$ 、 $\alpha 3$ (ここでは、 $\alpha 1 = \alpha 2 = \alpha 3$)をもって放射状に広げられており、3つの切込み23、325、325の中心軸Rは、軸Aを中心として周方向に等間隔に配置されている。

【0038】補助具301は、スリット15に続く切込み23の他に切込み325を備えることで、切皮後の刺入の際に良好な柔軟性を発揮するため、針31の刺入がより容易なものとなっている。なお、鏝21において設けられる他の切込み325は、以上の説明のように2つの放射状に配置されたものに限らず、1つでもよいし、また3つ以上であってもよい。つまり、切込み325は、刺入後に施術者が手を放した状態で補助具301の自立が可能であればよく、切込み23及び325を等間隔に配置するほか、非等間隔に配置することもできる。

【0039】また、補助具301は、上述の補助具101と同様に、本体11の上端部に第2の鏝311を備えており、第2の鏝311には、スリット15に続いて切込み313が設けられている。従って、補助具301は、第2の鏝311によって剛性が向上されており、また切込み313は、スリット15及び切込み23とともに、内部空間13から外部への1つの開口を形成する。

【0040】最後に、図11を参照して、本発明の第5

の実施形態に係る補助具401(401a, 401b)について説明する。なお、図11は、補助具401の全体的な概観を表した斜視図であり、先の補助具1と同一の構成要素に対しては、同じ符号を付してある。補助具401において特徴的な構成は、スリット15を形成する本体11の断続部が外向きに折れ曲がり、鉤21のほぼ中間位置まで延設されていることである。この本体11の延設部411は、図11(a)に示すように、本体11の管状部から真っ直ぐに延伸し、棒F1内のようにこの管状部との間に角を形成するもの(411a)であってもよく、また、同図(b)に示すように、棒F2内のように本体11の管状部から緩やかな曲率を与えられて延伸するもの(411b)であってもよい。

【0041】このように本体11の管状部と鉤21との間に延設部411を設けることで、抜針時において補助具401を針31に取り付ける動作が容易となる。また、図示のように延設部411を軸線方向に渡って全体的に設け、施術者が針体31aを支える際にその指が延設部411に触れるようにしておけば、施術者と針体31aとの接触をより確実に遮断することができるという効果を得ることもできる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の第1の実施形態に係る鍼灸施術用補助具の概観を表した斜視図

【図2】同上補助具を上方から見た状態を表した平面図

【図3】同上補助具を使用しての施術における切皮前後の状態を表した、鍼灸針セットの断面図

【図4】同上施術における切皮後の刺入方法を示す図

【図5】同上施術において、針を刺入した後の補助具の着脱状態を示す図

【図6】針の案内の他の例を表した本体の平面図

【図7】針の案内の他の例を表した断面図

【図8】本発明の第2及び第3の実施形態に係る鍼灸施術用補助具の断面図

【図9】本発明の第4の実施形態に係る鍼灸施術用補助具の概観を表した斜視図

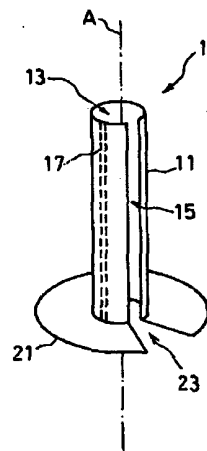
【図10】同上補助具を上方から見た状態を表した平面図

【図11】本発明の第5の実施形態に係る鍼灸施術用補助具の概観を表した斜視図

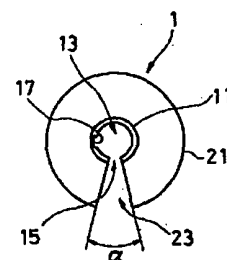
【符号の説明】

- 1…鍼灸施術用補助具
- 11…本体
- 13…内部空間
- 15…スリット(切込み)
- 17…溝(凹部)
- 21…鉤
- 23…切込み
- 31…針
- 41…針管
- 111…鉤
- 211…肉厚部
- A…本体の軸

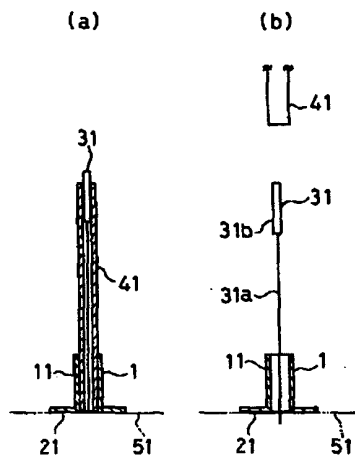
【図1】



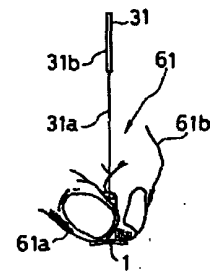
【図2】



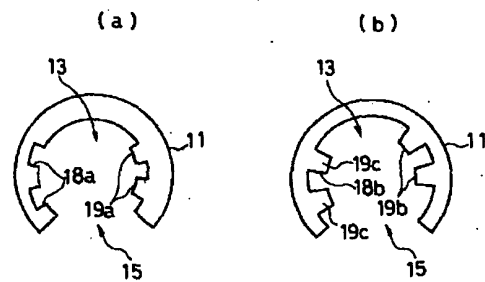
【図3】



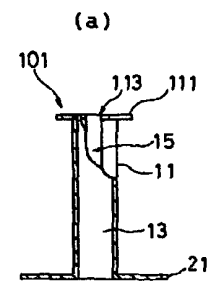
【図4】



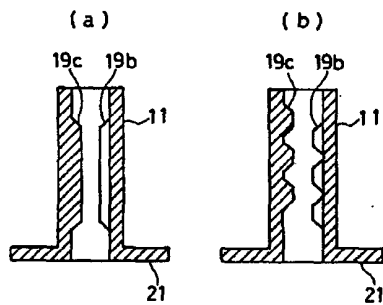
【図6】



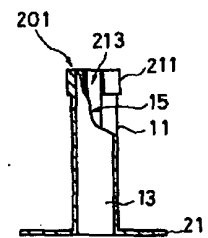
【図8】



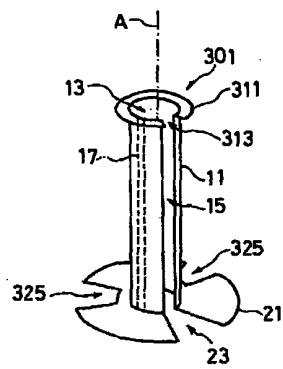
【図7】



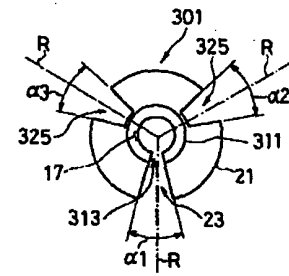
(b)



【図9】

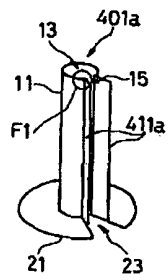


【図10】



【図11】

(a)



(b)

